

理事会報告①

日本菌学会 2019 年度第 4 回理事会 議事録

日時：2020 年 3 月 28 日（土）～ 4 月 3 日（金）

出席者（順不同，敬称略）：

会長 田中千尋 副会長 矢口貴志

理事：清水公德（庶務），伴さやか（庶務），糟谷大河（国内集会），谷口雅仁（国内集会），山田明義（日本菌学会会報編集責任者），保坂健太郎（国際集会），中島千晴（国際集会 [AMC]），細矢 剛（企画・広報・教育・普及），田中栄爾（編集委員長），本橋慶一（会計）

監事：大和政秀，稲葉重樹

会議成立の確認

新型コロナウイルスの感染防止を図るため，28 日に東京理科大学葛飾キャンパスで実施予定だった本会議をメール持ち回り審議の形式とした．本議事録はメール履歴から事項別書き出して作成した．

【報告事項】

1. 庶務関係（清水・伴理事）

(1) 会員動向

2020 年 2 月現在，正会員 568 名（国内 526，国外 42），学生会員 153 名（国内 137・国外 16），終身会員 115 名（全て国内），名誉会員 23 名（国内 20，国外 3），功労会員 2 名，賛助会員 14 社，会員総数 875 名．

(2) 逝去会員（前回以降，3 月まで）

古川久彦氏（名誉会員；2020 年 1 月 25 日）

(3) 会議の開催状況（前回以降，3 月まで）

第 8 回メール理事会（2020 年 2 月 25～28 日）中高生向けのイベント（国立科学博物館との共催）中止について（原案承認）

第 1 回持ち回り総会（2020 年 2 月 14～28 日）授賞候補者および授賞候補論文の選考について

第 1 回授賞者および授賞論文選考委員会（2020 年 1 月 30 日）

第 1 回名誉会員選考委員会（2019 年 12 月 6～23 日・メール会議）

(4) 日本菌学会授賞者および授賞論文の選考

日本菌学会賞	山田明義氏
日本菌学会奨励賞	瀬戸健介氏
日本菌学会奨励賞	山本航平氏
日本菌学会教育文化賞	森本繁雄氏
日本菌学会平塚賞	Kensuke Seto, Yosuke Degawa; <i>Pendulichytrium sphaericum</i> gen. et

sp. nov. (Chytridiales, Chytriomycetaceae), a new chytrid parasitic on the diatom, *Aulacoseira granulata*, Mycoscience vol. 59, pp 59–66, 2016.

日本菌学会会報論文賞 白水貴・稲葉重樹・牛島秀爾・奥田康仁・長澤栄史；「日本産 “*Auricularia auricula-judae*” および “*A. polytricha*” の分子系統解析と形態比較による分類学的検討」，日本菌学会会報 59 巻 pp 7–20.

日本菌学会会報論文賞 藤原沙耶・遠藤直樹・早乙女 梢・前川二太郎・中桐 昭；「鳥取砂丘海岸に生息する好砂海生菌の多様性と生態」，日本菌学会会報 59 巻 pp 25–37.

(5) 契約の更新

勝美印刷との業務委託契約を自動更新した．網野誉税務会計事務所との業務委託契約を自動更新した．

(6) 2019 年度業務・会計監査

2020 年 5 月，勝美印刷内学会事務局にて大和監事，稲葉監事，網野会計士，近藤氏（勝美印刷），庶務理事，により監査を行う予定．

(質疑応答)

・正会員数が 2019 年 3 月から 11 月にかけて大幅に減少したが，この数字に間違いのないなら，その原因と対策があれば→この時期の会員の大幅減少は，会費不払いへの除名によるものである．それまで 3 年ほど除名の実施が滞っていた．

・終身会員の数が 18 年 3 月から大幅に減っている原因は？→この前の年に（高齢の）終身会員に対してアンケートを行い，「退会したい」希望者，「郵送物（会誌類，選挙の書類，名簿その他）は全て不要」という終身会員，連絡先不明の終身会員（アンケートが戻って来た）を削除した．いずれも記録は残してあるので，再度復帰したいという希望には応えられる．

2. 国内集会関係（糟谷・谷口理事）

(1) 日本菌学会第 64 回大会（大阪大会）の進捗状況

2 月末に事前参加登録を終了（事前参加登録者：159 名）．3 月 13 日に要旨登録を終了（受賞講演：3 題；一般講演：120 題；中高生ポスター発表：23 題）．大会日程およびプログラムを編成しているところで，5 月 20 日（水）ごろに講演要旨集を発送できる

ように準備を進めている。しかし、会場となる大阪
市立自然史博物館では、新型コロナウイルス感染症
の拡大防止のため当面の間（少なくとも3月いっば
いは）臨時休館となっていることが報告された。

(2) 2020年度日本菌学会菌類観察会（八王子フォーレ）準備状況

開催日：2020年9月27日（日）
観察地：A. 松木日向緑地・富士見台公園（東京都八
王子市）、B. 八王子市長池公園（東京都八王子市）、
C. 津久井湖城山公園（神奈川県相模原市）
同定会場：東京都立大学南大沢キャンパス8号館生
物学実習教室（東京都八王子市）
募集人数：80名
参加費：2,500円、学生（大学院生以下）1,500円
申込期限：2020年8月31日（月）
共催：東京都立大学牧野標本館、菌類懇話会、東京
きのこ同好会、神奈川県キノコの会
以上の予定をニュースレター（以下NL; 3月号）に
掲載済みで、日菌報（5月号）への投稿原稿を準備
していることが報告された。

3. 国際集関係（保坂理事）

(1) 日本・台湾合同シンポジウムの開催について
台湾側とメールで協議をした内容が報告された。コ
ロナウイルスの影響が未知数であるため、実際の開
催可否・時期等については詰め切れず、現時点で10
月の開催を予定という以上は決まっていない。

4. 企画・広報・教育・普及関係（細矢理事）

(1) 普及事業
中高生向け行事として、3月14日から科博にて開催
予定の特別展「和食」に絡んだ内容で実施を検討し
ていたが、新型コロナ対策のために開催が延期され、
年度内の開催を断念した。

(2) NL発行状況
2020年-1号（1月号）：報告7（うちAMC6）、書評
2
2020年-2号（3月号）：報告7（うちAMC5）、紹介
2（うち学位論文1）、掲示板2（見込み）

(3) 標本の輸入に関する農水省規制改定について
植物標本を輸入する際に「Phytosanitary Certificate」
が必須となった処置の撤回を求めて、植物分類学
会・分類学会連合とともに農水省に働きかけてきた。
2019年12月をもって元の適用に戻す（Phytosanitary
Certificate 不要）方向となったが、その後3月末ま
で運用開始が延期された。現在、新型コロナ対策の
ために、さらに延期されている。

(4) 菌学会ホームページ英文化：英文化すべき部分を選定

し、翻訳取組中。

(5) 本年度の微生物生態学会との普及行事については先方
と相談しているところ。

5. 編集委員会関係（田中栄、山田理事）

(1) Mycoscience の発行状況
61 (2): 49–100 (pp. 53), Mar 2020（総説1編、論文2編、
短報4編、資料1編）
61 (3): 101–152 (pp. 50), May 2020（総説1編、論文4
編、短報2編）
Accept 6篇 審査中&返信待 40編 2020.3.23 現在

(2) 日本菌学会会報（以下、日菌報）の発行状況
60 (2) : 総説1編、短報1編、資料1編を掲載（11
月発行）
日菌報61 (1) より英語論文の掲載が可能となった
ことから、60 (2) に新たな投稿規定を掲載した。
60 (2) 分はJ-STAGEから公開済、日菌報50巻から
をJ-STAGE搭載準備中。

(3) 投稿状況
・Mycoscience
2019年：受付論文数121報、受理30報、却下73報
（却下率60%）、審査中18報。
2020年：受付論文数47報、受理4報、却下22報、
審査中21報（-2020.3.23）
・日菌報
2019年度の投稿数：審査論文数12報、受理7報、
却下1報（却下率8.3%）、審査中4報（-2020.3.19）
・学会賞受賞総説：日本菌学会賞：2012年度（1名）、
2016年度（1名）、2017年度（1名）、2019年度（1
名）；奨励賞：2014年度（1名）、2016年度（1名）；
年度内投稿予定、2018年度（1名；年度内投稿予定）、
2019年度（1名；年度内投稿予定）投稿待ち。

(4) オープンアクセス論文について
本年度の予算で以下の2編の総説をMycoscienceに
オープンアクセスとして掲載することを決めた。オ
ープンアクセス費用は、361,900円×2 = 723,800円。
1. Yamanaka, T. Advances in the cultivation of the highly-
prized ectomycorrhizal mushroom *Tricholoma matsutake*.
2. Oide, S. & Turgeon G. Natural roles of nonribosomal
peptide metabolites in fungi.

(5) 編集経費
Mycoscience 編集補助謝金としてスタイルチェック
代の支出、日菌報の英文校閲料およびJ-STAGE登
載作業料が報告された。
（質疑応答）
編集委員長が招待論文を要請できることは承知している
が、招待論文をOA化することが承認されていたか。最
後の例となるのだと思うが、審議事項に入れた方がよい

と思う。→どの論文をオープンアクセスにするかは編集委員長に一任されている。どちらの論文も会員からの投稿であり、謝金、投稿料、超過ページ代等は発生していない。支出項目は会計担当理事と相談し進めた。

6. 会計関係 (本橋理事)

2020年2月29日時点の中間決済表について報告された。AMC関連の事業費は当初、一般会計に入れない予算案で作成されたものの、現時点では本会計に組み込み仮締めをしている。最終的に本会計に組み込むか、当初の予定通り独立させるかのどちらにするかは会計士と相談が必要となっていることが説明された。

7. Mycoscience 刊行ワーキング報告 (田中千会長)

J-Stage 上の Editorial Manager の構築が終了した。4月1日以降稼働する。コロナ禍等の影響で、版面デザインや製版・校正プロセスについて対面で詰める事ができていないが、メール等を利用して進めていきたい。次年度は、Elsevier での投稿受付をある程度まで継続しながら、J-Stage での投稿受付を開始する必要がある。総会終了後、Elsevier に J-Stage 上で出版公開する旨を伝え、いつまで原稿を受け付けるかを相談する予定。

【審議事項】

1. 国内集会

(1) 日本菌学会第64回(大阪)大会

会場である大阪市立自然史博物館は当面の閉館延長が決まり、少なくとも5月末までのイベント等中止が継続となっている。6月の大阪大会については、「中止」とする(「延期」はなし)。まずは、中止することを申込者や会員に周知したい。本件の対応について細部に至るまでメール上で検討がされ、4月3日時点で、修正された提案内容に対して全員の了承が得られた。

(コメント、質疑応答)

・懇親会場のキャンセル料の発生時期を勘案して、中止判断をする日時も決めるべき。

あと半年以上は全国規模の集会は無理ではないか。

・大阪大会の1年延期をしない理由は?→今回は講演要旨集発行を以って発表成立の扱いとしたいため。また、2021年度の大阪での大会開催は、会場となる博物館の行事予定との関係で厳しい。2021年は熊本、再来年以降という可能性はもちろん否定しない。

(2) 大会中止の際の代議員総会について (追加)

Mycoscience の件もあり、メール等により総会を開催する方法を考えるべき。→早期に庶務から持ち回りか Web 会議か実施の旨をアナウンスする。会員説明会については、説明資料を学会ホームページに掲載する。

(3) 2020年度日本菌学会菌類観察会(八王子フォーレ) (コメント)

日菌報へのお知らせ掲載については、中止となる可能性があることを追記したい。野外での活動がメインだが、同定作業はできるだけ室外とか広い風通しのよい場所とかで行うことなど配慮が必要か。

(4) 日本菌学会第65回(熊本)大会の開催案の策定

日程:2021年5月28日(金)編集委員会,理事会,総会(代議員会),合同懇親会

2021年5月29日(土)大会,懇親会

2021年5月30日(日)大会

会場:市民会館シアーズホーム夢ホール(熊本市市民会館)

(予約済み),熊本城ホール・会議室(予定)

大会実行委員会(予定,敬称略):

会長 宮崎和弘(森林研究・整備機構 森林総合研究所九州支所)

事務局長 木下晃彦(森林研究・整備機構 森林総合研究所九州支所)

実行委員 高畑義啓(森林研究・整備機構 森林総合研究所九州支所),辻田有紀(佐賀大学農学部),金子周平(熊本きのこ会),村上康明(大分きのこ会),原田栄津子(宮崎大学農学部),佐藤大樹(森林研究・整備機構 森林総合研究所),中村圭子(熊本県林業研究・研修センター),三枝敬明(崇城大学生物生命学部)

2. 国際集会

(1) 日本・台湾合同シンポジウムについて

引き続き、担当理事と台湾の担当者が10月開催の広報について準備を進める。日本側の招待演者3名分の飛行機代、学生および若手研究者が発表するための参加補助の予算案並びに募集要項について審議された。概ね原案の通り承諾されたが、開催可否は保留。

(コメント)

・10月においてもコロナ禍が収束していない可能性が十分あるので、いつの時点で開催の可否を判断するのか、台湾側と十分相談して欲しい。仮にでも開催日を指定(明示)したうえで、募集案をつるべき。

・理事が招待される場合、研究費などで旅費が工面できる場合には辞退するなどの申し合わせをしておくこと。

3. 企画・広報・教育・普及関係

(1) UNITE 国際ワークショップの開催について

“UNITE”は菌類のバーコードに関するイニシアチブであり、GBIFのような世界的な活動とも結びついているが、日本ではまだまだ知名度が低い。その使用法や UNITE / GBIF へのデータ提供と利用をもっと推進すべく、その使用法を学べるワークショップを開催したい。

日程：2021年1～2月

対象：UNITE や GBIF の利用・登録出版をしたい大学院生や研究者

内容：1) Understand how SH works in molecular fungal identification. 2) How to use UNITE website and data for identification. 3) How to incorporate and publish your data through PlutoF. 4) Understand how UNITE is connected to GBIF for wider understanding of biodiversity of fungi (and other organisms), and how the data published through PlutoF.

主催又は共催：日本菌学会・科博・GBIF

賛同するという意見が10名いたが、コロナ禍の現段階で見通しがつきにくく案段階で保留である。

(コメント)

- ・国際活動の一環にはなるだろうが、科研費取得に関係するかは不明である。ただし規模が10-20名程度のワークショップであれば、(かつ普及目的でも)インパクトが薄い。
- ・このワークショップの需要はどこにあるか。ドライの微生物生態関係者を当学会に呼び込むことを目指すならば、需要のありそうな学会との共催も探るかどうか。
- ・この内容なら欧州の講師はWeb会議システムを使ってうまくできるのではないか。

(2) NL オープン化の方針について

全体として承諾する理事が多数であったが、具体的な4点を挙げてそれぞれ意見が交わされた。1) オープン化後もNLの印刷と会員への配布を継続するか、2) 会員向けの事務的な記事(理事会報告など)以外をオープン対象として学会ホームページに掲載する、または3) 会員向けの事務的な記事はパスワードが必要な会員向けページにアップするか、メーリングリストで配信する。4) オープン化時期は、2021年度前半に編集委員で相談し、後半で準備、2022年度1号から実施、可能であれば、2021年3号を施行的にオープン化する。

(コメント)

- ・前回理事会でOA化が承認されたところだが、オープンアクセスの定義が不明確であり、移行時期の話もさることながら、この点をまず明らかにして欲しい。
- ・オープン化後もぜひ、印刷と配布は残す方が良くと思う。オープンアクセス化に関しては、著作権者をどのようにするか(学会、著者個人、学会+著者)、利用許諾の範囲、公開手段等についても提案して欲しい。
- ・現状、編集委員で印刷用PDFを編集している筈なので、オープン化に伴う追加作業(検討を要する特段の編集作業)は必要ないように思う。
- ・前回理事会の議論がオンライン化+フリーアクセス化の提言だとすれば、フリーアクセスの場合は閲覧・DLに

制限はないが、二次利用・再配布等には著作権者の承諾が必要で、学会webページでのみ公開されている場合は、基本的に利用者はそこにアクセスする必要がある。

・3)の会員向けページへのアップとメール配信は、印刷物配布の状況でも実施してもいいのではないか。実施してみて「これだったら印刷物は不要だね」という意見が聞かれれば、印刷物廃止への足がかりとなるかも知れない。

・オープン化の意義に印刷物廃止についても含まれているのであれば、印刷廃止について早々に進めても良いのではないか。

・学会の事務的な記事(理事会議事録等)の公開のルールはどこかに明示されているか?→一般社団法人法第97条。定款により年4回の理事会を開催し、その議事録を残すことが規定されている。しかしながらこれは、会員全てにオープンする事が義務ではなくて、監査等の時に見られる状態で保管されていることだと思う。1)NLの印刷媒体を残すならオンライン上に掲載しなくても良いが、隠すものでもないので、2)または3)オンラインのみになってしまうなら同じようにフリーアクセス化しても良い。

以上。